

中世・草戸千軒探検 27

～祈る(まじない)～

草戸千軒 I 展示室では、今からおよそ 700 年前の鎌倉時代後期を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復原するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活の様子を詳しく紹介しています。

今回は、「祈る」のコーナーに展示した資料から、この町に暮らした人々が「まじない」に込めたさまざまな願いについて紹介します。

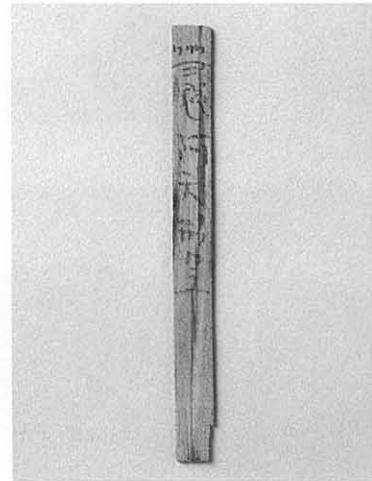
「まじない」とは、人々が様々な願望をかなえるため、超自然の存在に働きかけた一種の民間信仰です。科学・技術が発達した現代とは異なり、当時の人々は疫病や自然災害といった生活を襲う多くの困難を解決するために、神秘的な「まじない」つまり「呪術」の力に頼っていたのです。

近年、各地で中世遺跡の発掘調査が進展し、多くの「まじない」に関する資料が出土するようになり、中世の人々の生活が「まじない」と深く結びついていたことが明らかになってきました。草戸千軒町遺跡からも多数の呪術関係資料が出土しており、人々の祈りや願いの一端をうかがうことができます。

写真1は、中国から伝わった道教の神で、疫病を鎮める力があつたといわれる「天形星」の名が記された呪符(まじない札)で、室町時代の井戸から出土しました。井戸は生活に不可欠な水を得るための施設で、人々の健康にも密接に関わっていたため、「まじない」の対象とされる機会も多かったのでしょう。

写真2は、素焼きの土器碗の内面に何かの呪文を記したのですが、その意味はわかっていません。「まじない」はその神秘性を維持するために秘伝とされており、おもに口伝によって継承されていました。したがって文字に書かれた記録がほとんど残されておらず、どのような呪文に何の効果か期待されたのかについては、不明な点が多く残されています。

写真3は「人形」、写真4は「舟形」と呼ばれる資料です。人についた災いを移し、水に流し去る役目を担っていたと考えられ、現代でも行われる「雛流し」には、こうした風習が形を変えながら受け継がれています。



【写真1】呪符



【写真2】墨書土器



【写真3】人形



【写真4】舟形

(主任学芸員 鈴木康之)